

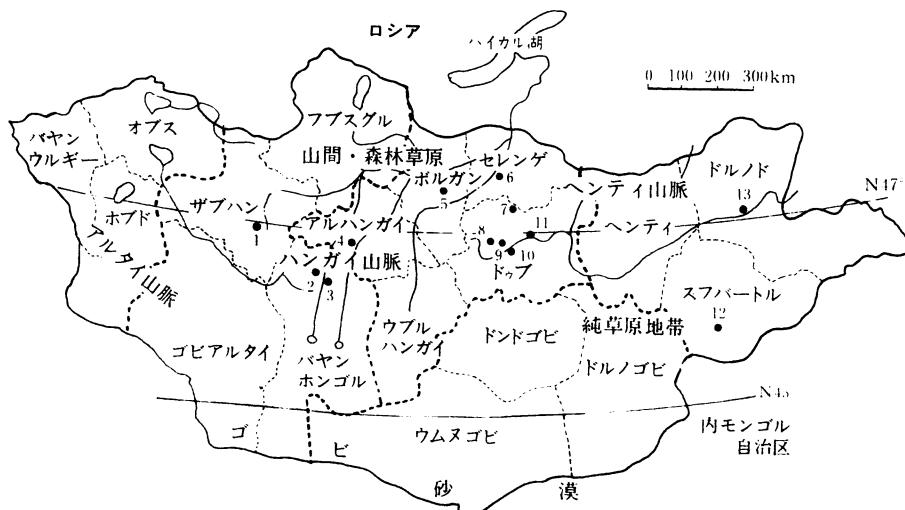
モンゴルの家族 と コミュニティ開発

島崎美代子・編 長沢孝司

21

第1章 遊牧民と自然と家畜——遊動と家畜管理——

風戸 真理



調査地点ソム*

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| 1. オリヤスタイル(アイマク・センター) | 8. バヤンハンガイ |
| 2. サク | 9. アルカラント |
| 3. ジャルガラント(バヤンホンコル・アイマク) | 10. アルタンボラク |
| 4. チョロート | 11. ウランバートル市 |
| 5. エルデネット | 12. オンゴン |
| 6. ガルハン市 | 13. チョイバルサン
(アイマク・センター) |
| 7. ジャルガラント(トウブ・アイマク) | |

注: 1992年現在、今日では若干行政区が変更している。
-----県境
-----中央行政区区分

ここに記されるのは、バヤン・ハイルハン山とよばれる小高い美しい独立峰のふもとを流れるハノイ川とその支流の谷筋に、家畜を追って暮らす遊牧民の生きざまである。私は、このハイルハンと呼ばれる土地で、天幕を住居とし季節ごとに家畜をつれて遊動する牧民家族のもとに身を寄せ、1997年の5月から98年の4月までの合計216日間、寝食を共にして彼らの家畜管理方法を調査した。

ハイルハンは行政的には、アルハンガイ・アイマクのチョロート・ソムに属する1つのバグである(見直し地図の4参照)¹⁾。首都ウランバートルから西へ約600kmのところに位置するが、交通・通信のインフラが不備であるため、畜産物以外の物品が少なく、現金経済があまり浸透していない²⁾。地理的にはハンガイ山脈北面の海拔1,700m上の山地域にあたり、亜寒帯の冬季小雨気候区に属し(年間降雨量約400mm)、森林草原が発達している。

ハイルハンの人々は、雨が少なく寒さの厳しい自然環境に適応して、自然草地を利用した牧畜を生業としている。統計によれば、ハイルハン・バグの人口は725人、世帯数は182世帯、家畜の総頭数は14,411頭(1996年12月現在)である。飼養されている家畜は、彼らの分類に従えば牛(ヤクとウシの総称として)、馬、羊、山羊の4種類である。この地方は世帯あたりの平均家畜頭数

表1-1 ハイルハン行政区の家畜所有状況（1995年12月15日現在）(頭)

	馬	牛	羊	山羊	合計
総頭数	1,236	2,716	6,117	1,347	11,406
頭数割合（%）	10.8	23.8	53.6	11.8	100
1世帯当りの平均所有頭数	8.8	19.4	43.7	9.6	81.5*
1世帯当りの最多所有頭数	29	59	289	55	
所有率（%）	93.6	99.3	90.7	82.9	

注：行政区の役場が作成した統計資料による。

この時点の世帯数は140戸。1996年12月の調査では、世帯数182戸、家畜総頭数14,411（うち羊6,880頭）であった。

* モンゴル平均は172.3頭（1995年12月現在）。

が少なく³⁾、貧しい牧民が多い（表1-1）。

ハイルハンの人々は、民主化後、独立自営牧民としての新しい生活を開始した。家畜の管理方法、売買・処分計画、季節移動の時期と場所といった遊牧生活のすべてを自分自身で決めるという、今までに経験したことのない生き方に対処する方法を人々は模索している。そんな変革期の牧民の姿を、遊動と家畜管理を切り口に伝えていきたい。

1 ハイルハンの牧畜生活の1年

はじめに、ハイルハンの遊牧民の1年間のくらしを、牧暦（24ページの表1-2）を追ってみてみよう。ハイルハンでは、ほとんどの人が1年に4回、宿营地を変える。4つの宿营地は四季に対応している。牧民の1年は、チベットの陰暦による正月を祝って始まる。このころに春营地に移り、その後、夏营地と秋营地を経て、冬にはほぼ毎年、同じ場所に戻って冬營するといわれる。四季の宿营地には、季節ごとの自然環境と、子どもの通学などの社会状況に適応するのにふさわしい場所が選ばれている。

遊動の単位は、婚姻によって結ばれた成人男女とその未婚の子どもたちからなるいわゆる核家族である。わかものは結婚すると、新しい天幕式住居（ゲル）を構え、双方の両親と協力しあいながらも、家畜をはじめとする財の所有と消費の面では独立する。草原では季節移動のたびにいくつかの世帯がさまざまな組み合わせで集まり、協業のための居住集団（ホトアイル）⁴⁾をつくる。これから、牧民たちの生活を、季節ごとの家畜管理を中心にみていく。

春——出産と母子関係の管理——

モンゴルの春は、茶色い大地の上を雪混じりの強風や砂塵が吹き荒れる季節である。家畜たちは飢えと寒さで消耗している。伝染病が流行したり、大寒波が襲えば多くの家畜が失われる。とくに当歳仔は、冬から春の時期を越すことができないものが多い。人間にとっても、夏と秋に貯蔵しておいた食料が底をつく。家畜の乳も涸れる。春は1年のうちでもっとも苦しい時期なのである。現金もなく、主要な食料品である小麦粉が尽きてても買うこともできない。干し肉を入れた糊のような粥を1日に1回するだけの貧困家庭もある。

春はそんな時であるが、ハイルハンの人々は春の始まりである旧暦の正月を盛大に祝う。どの家でも、客を迎えるためにたくさんのごちそうを準備する。秋から大切にとっておいた上等な骨付き肉をゆで、たくさんの水餃子をつくる。若い家族は牛車をして、親子そろって晴れ着に身をつつんで親戚の家をたずねて巡る。そして、民族衣装の生地やワイシャツなどの儀礼的な贈り物を交換し合う。大切な客には牛乳から作る自家製の蒸留酒や、まれに秘蔵の馬乳酒が振る舞われることもある。

1998年の元日は新暦の2月27日だった。ハイルハンの人々は、この新年の祝いの前後に春营地へ移り、そこで牛、羊と山羊、馬の順で家畜の出産を迎える。私は、ハイルハンでいちばんの働き者であるダシジャウ（65歳、男性）の春营地で、羊と山羊の出産とその後の母子管理の方法を観察した。当時、ダシジャウは、息子とその妻の母との3世帯でホトアイルを構成していた。この3

表1-2 マンダーのキャンプを中心とする1997年度のハイルハンの

牧民の暦			新暦 月、日	特記事項	牧畜作業					
土 曜 日	日 曜 日	土 支			搾 乳 期 間	羊	搾 乳 期 間	山羊		
					出産期間		出産期間			
初春	元 旦	巳	2.8	1997年丑年の元日						
仲春	2 月	亥	3.1	(調査は97年5月26日)に始まったので、春の牧畜作業は98年度分を						
晩春	1 火	辰	4.8							
初夏	1 水	酉	5.7							
	16 金	丑	5.23							
	21 水	午	5.28	■夏营地へ移動						
	24 金	申	5.3							
仲夏	1 金	卯	6.6	*学校、夏休み						
	22 金	子	6.27	ハイルハン山の祭						
	24 日	寅	6.29							
晩夏	1 土	申	7.5	*毛皮等買取商人来る						
	13 土	酉	7.18							
	21 金	辰	7.25							
初秋	1 月	寅	8.4	*草刈りと干草作り						
	21 土	酉	8.23							
	25 水	丑	8.27							
	27 金	卯	8.29	■秋营地へ移動						
仲秋	1 火	未	9.2	*特別肥育放牧						
	9 木	卯	9.11	*ハイルハン分校の入学式と新学期開始						
	20 日	寅	9.21							
	27 日	酉	9.28	冬時間になる(時計を1時間遅らせる)						
晩秋	1 木	丑	10.2	*肥育放牧						
	19 日	午	10.19	*家畜税徵収						
	21 火	丑	10.21	*冬春用食料準備(マンダーは羊6頭、牛3頭屠殺)						
	24 金	亥	10.24	■冬营地へ移動						
初冬	1 土	未	11.1							
仲冬	1 日	子	11.3	*国勢調査						
晩冬	1 木	子	1.29							
初春	1 金	巳	2.27	1998年虎年の元日						
	4 月	申	3.2	■春营地へ移動						
	15 金	3.13		*家畜の斃死多し						
	24 日	3.22頃		ブルト谷で伝染病発生						
		4.2								
		4.7								

注: *の事項は日付に対応せず、その月または、その頃に起こったことを示す。

■は季節ごとのキャンプの移動日に付けられているが、次の移動までその营地にとどまるもの
■搾乳期間、■出産期間。

牧畜作業の日取り

その他家畜				自然
牛		馬		
搾乳	出産	搾乳	出産	
~	~	~	~	~
参照)				*草の芽吹き
				*嵐と砂塵
				*草の成長
				*日中快晴、午後夕立の日多い
				*多雨 洪水
				*草が枯れ始める 初雪積もる(11.5cm)
				*川が氷結し始める
				*吹雪、本格的な冬入り
				*野火発生
				大寒波、最高気温-19℃
				ハノイ川解氷、水が流れ始める 草の萌芽、渡り鳥飛来、降雪

とする。

世帯はハイルハンでは比較的

多くの家畜を所有しており、人から預託された家畜も合わせると、羊491頭、山羊75頭の合計566頭がダシジャウの春营地で管理されていた(26ページの表1-3)。

現在のモンゴル国ではふつう、羊と山羊はあわせて「羊・山羊混成群」として放牧管理される。さらに、一緒に春營している3世帯の羊・山羊群はひとつの「放牧群」としてまとめて管理され、夜には「羊囲い」とよばれる風をよける丸太造りの囲いにまとめて入れられた。

4月4日、放牧から帰ってきた羊・山羊群は、いつものようにキャンプ地内の囲いに入れられた。羊・山羊たちはいつも囲いの中ではすぐに休眠に入るが、この日、群れの喧騒はなかなかおさまらないかった。ダシジャウの妻ノロウ(63歳、女性)は薄暗い天幕の中で、野外の羊・山羊の啼

表1-3 被調査世帯における家畜の所有・飼育状況と

キヤンブ構成	飼育者		家畜の所有者				所有者別	
	略号	名前	名前	性別	満年齢 歳	居所	総頭数	馬
98年の春に一緒	D	ダシジャウ	ダシジャウ トゥムルバートル アルタングレル エツエンホロル ダシゼベク	男 々 々 女 男	65 中年 中年 老人	草原 ソム・センター ソム アイマク・センター ?	176 126 78	13 9 11
	Gn	ガンバートル	ガンバートル ツェレンナドミト ドラムスレン	々 女	33 中年	草原 ?	154	15
	P	ポンスル	ポンスル	々	55	草原	145	20
	M	マンダー	マンダー アディヤー パワー	男 々 々	63 79	ソム・センター 草原	*119	
	B	パワー	パワー マンダー ゴンボー・ダルガ	々 々 々	32 老人	草原 ソム バグ・センター	*104	11 18
97年の夏に一緒	H	ハルザイ	ハルザイ	々	27	草原	137	11
	Tr	トゥルフー	トゥルフー	々	55	?	70	8

注：「わかもの」は16歳未満の男女、「乳・幼児」は7歳未満の子どもである。

所有者の年齢、居住場所、世帯内の消費人口は1998年春の状況。

マンダーはパワーに馬の飼養を委託し、パワーはマンダーに羊・山羊を委託している。この2託している分の合計を示した。

家畜数の調査方法は、調査時期が1995年12月15日のものは統計により、それ以外は聞き取り

き声にじっと耳を傾けていたが、「今夜あたり、仔羊が生まれるよ」といった⁵⁾。ノロウはこの夜、60cm四方の綿入れ布の肩掛けカバンを縫いあげた。翌日、羊・山羊の放牧に付き添う牧童にこれを持たせた。放牧中に生まれた仔羊・仔山羊をもって帰るための保温カバンであった。

4月5日、放牧の後でこの年はじめての出産があった。2頭のメス羊が出産

世帯内の消費人口

調査時期 年.月.日	家畜頭数			世帯内の消費人口(人)			
	牛	羊	山羊	成人男性	成人女性	わかもの	乳幼児
98.4.8	21	125	17	2	3	1	
98.4.8	19	93	5				々
98.4.8	10	45	12				々
98.4.8	11	6					々
98.4.8		39					々
98.4.8	25	98	16	1	1	0	3
98.4.8	3						々
98.4.8		5					々
97.6~7	80	25	1	2	31	28	0
97.6~7	61	19	2	1	31	2	1
97.6~7	26	16					々
97.6~7	28	22					々
97.7.19				1	1	1	
97.6~7				2	1	0	
97.8.1							
95.12.15	23	76	27	1	1	0	3
95.12.15	21	30	11	1	1	4	1

人の所有家畜数には「*」を付し、自管理分と委

または直接観察による。

裸のまま母と一緒に放牧に出され、母の傍らで遊んだり乳を飲んだりして過ごす。夜は、母と一緒に野外の囲いで休む。600頭近いすべての羊・山羊を収容できる大きな囲いの隅に、とくべつに弱い個体と母子のための小さな囲いがつくってあり、そこでは仔羊が母羊を見失って迷って再会が容易で、他個体から攻撃されることも少ない。

したが、仔羊の1頭は出生直後に死亡した。翌日から、放牧中にも囲いの中でも、昼夜を問わず次々と仔羊・仔山羊が生まれた。

放牧中に仔羊が生まれると、ふつう牧夫は、母子ともに追い立て群れと行動をともにさせる⁶⁾。一方、仔山羊が生まれると、羊膜を母山羊がなめ取るやいなや、牧夫は新生仔を取り上げてカバンに入れる。山羊は、羊と比べて寒さに弱いと考えられていて、出生時から終生にわたって寒さから手厚く保護される。仔山羊は生後の数週間、人間の住居の中で育てられる。昼も夜も、家具の間を走り回ったり、柱に繋がれたり、囲いに入れられたりして過ごす。綿入れの服を着せられることもある。一方、仔羊は出生の翌日から、



自分の羊を数えるハルザイと妻のオウンエルデネ。

山羊に手をかける理由はほかにもある。山羊は人間が介助しなければ、実の母子以外の組み合わせで哺乳ペアになってしまないので、一緒に放牧に出さないという人もいる。羊でも山羊でも、元気で腹ペコな仔は実母以外の乳房も求める。もしもほかのメスがこれを受け入れると、そのメスは実子に授乳しなくなったり、実子の飲む乳が不足したりする。牧民にとって大切なのは、すべての母子関係がうまくいくことである。彼らは弱い仔の発育も助けて、できるだけ多くの個体を成長させようとするのである⁷⁾。

毎日、朝晩に1回ずつ、母山羊を仔山羊のいる天幕に入れ、哺乳の機会を与える。このとき、仔が実母以外の乳を吸わないよう人間が見張っている。乳量の多い山羊からは少しだけ搾乳もする。出生直後に仔が死んだメス羊とメス山羊も搾乳する。わずかな量でも搾乳するのは、仔山羊は乳を飲み過ぎると下痢をするから、子を失った母は乳が張って気性が荒れるから、などと説明される。これは結果として、人間の食糧難を補ったり、母乳の足りないほかの仔に与えたり、搾乳を習慣づける準備になったりしているのだろう。また、搾乳するこ

とでメスの乳が涸れるのを遅らせ、実母に受け入れられない仔が出た時に、これをペアにして新たな哺乳関係をつくらせることもできる⁸⁾。

家畜の母子の相互認知と哺乳関係がうまくいくように介助するのは女性の仕事である。よちよち歩く仔が母のもとへたどり着けるよう、また母の乳首に吸いつけるよう、牧民は仔を拾い上げて母の腹の下に押し込む。出産後はじめて哺乳を介助する機会には、牧民は新しい母子ペアをよく見て、仔に異常がないか観察し、また母子の組み合わせを脳裏に焼き付けているようでもある。牧民は哺乳がうまくいくように願って、できる限りの激励をする。歌をうたってやる人もいるという⁹⁾。ノロウは、哺乳中の仔の尻尾の付け根を手で持ち、左右に細かく振った。元気な仔羊・仔山羊は乳を飲むときに、イヌが喜びを表現するときのように、尻尾をちぎれるほどに激しく振る。ノロウは動かない小さな尻尾を見て、その仔が乳を飲む手伝いをしてやっていたのだ。

4月8日の朝、3家の女性たちは一齊に羊の新生母子にマーキングをした¹⁰⁾。これまでに、メス羊16頭、メス山羊6頭が出産していた。新生児には死亡や双子があって、仔羊は19頭、仔山羊は8頭いた。女性たちは自分の羊に、母子の組み合わせごとに、赤と水色のリボンや端切れ布の同色のものを、右前足なら右前足といったように同じ側の足に結びつけた¹¹⁾。布の色の種類が少なくて、同じ足に同じマーキングを付される個体は多かった。しかし、女性たちは母子の組み合わせを知っているので、マーキングはとくに家族以外の人の認知を助けるものだと考えられる¹²⁾。

牧民は、新しく生まれてくる仔と母との組み合わせをひとつももらさず認知し、成長後も母系の系譜上に位置づけてよく覚えている¹³⁾。ハルザイ（27歳、男性）に、彼の所有する羊・山羊の系譜関係を写真付きの個体カードをもとにたずねたところ、全個体の母子関係を教えてくれた¹⁴⁾。男性は群れの通年の母子関係の総合的な知識では女性をしのぐ。しかし、新生仔の母子関係については女性の記憶に頼ることがある。女性はその年に生まれた個体の母子関係について男性よりも正確で詳細な情報をもっているが、前年以前の関係につい

てはよく覚えていないことが多い。家畜の個体識別の知識にはこのような性差がみられる。男性と女性が分担する家畜管理の作業は、このような知識の性差と結びついている。

ハイルハンの人々は、渡り鳥の飛来に夏のおとずれを感じとる。4月2日、ハノイ川が氷解し始め、半年間厚い氷に閉じこめられていた黄色くにごった水が流れ始めた。4月7日、雪解け水で湿った窪地に緑の若葉が芽吹いているのをみつけた。この日、渡り鳥を見たとか、鳴き声を聞いたとかいう会話が交わされた。しかし、翌日には雪が降り、ハイルハンの野は再び雪に覆われた。まだまだ不安定な季節の変わり目である。

5月末、若草が生えそろって草原を埋め尽くすころ、春营地で羊・山羊を一斉に搾乳し始める。搾乳をするためには、仔に乳を飲ませないようにしなければならない。このため、羊・山羊の群れを、仔の群れ（これを以下、仔群とよぶ）と母を含むその他の個体（母群とよぶ）の2群に分けて放牧し始めるのである。

毎日1回、午後3時ころに羊・山羊をまとめて搾乳する。牧夫はそれまで、母群と仔群を分けて放牧しておき、3時前に仔群を囲いに入れる。囲いは間に仕切りのあるひょうたん型をしていて、大と小の2つの部分からなる。仔群は小さい部分に入れ、その後で母群を宿营地に連れ戻し、母群の全個体を大囲いに入れてから、乳メス以外の個体を囲いの外へ出す。そして、囲いのなかに大人も子どもも入って、メス羊を全速力で追いかけ回して捕まえる。これを3頭くらいずつ組にして、革のロープを鎖編みにしながら、その輪の中に羊の首を編み込んでいく。羊が終わると、山羊も編み込む。それから、女性が搾乳する。

搾乳の後、小囲いから仔らを出して残り乳を吸わせ、そのまま母子一緒に放牧に出す。夜、宿营地に連れ戻されると、山羊は大囲いの中に、仔羊・仔山羊は大囲いの中につくられた仔専用の小囲いに入れられ、羊は囲いの外側で夜を明かす¹⁵⁾。仔は翌日の午後まで乳を飲めない。羊・山羊の母子は搾乳が終った時点から、1日の放牧が終る時まで一緒にいて、放牧から戻って別々の囲い

に入れられた時から、翌日の午後に搾乳が終わるまで分離されているのである。

しかし、毎日、搾乳の後に母子が会う機会が与えられ、夕方の6~7時間と一緒に過ごす。生まれた時から、毎日必ず哺乳の機会を与えるこのような管理办法は、母子の紐帯を長期間持続させるものである。仔羊・仔山羊は、生後半年たっても、放牧中にふと草を食べるのをやめて、母の乳房にくらいつく。夜、宿营地に戻った時には仔は母のもとへ走りより、乳を吸ったり、互いに体をなめ合ったり、耳などを噛み合ったりする親和的な行動をとった後、体を接触させて座り込んで休む¹⁶⁾。

夏——搾乳——

夏のハイルハンでは、ハノイ川に沿って白い天幕の集まりが点々と並ぶ。秋から春までの間、支流の谷筋に分散して住んでいた人々が、短い夏の間、つまり草原が青草と花々で埋めつくされる3カ月間だけ、ハノイ川沿いの数幅に開けた平野に集まるのである。夏以降の牧畜作業を、1997年のマンダー（63歳、男性）の家の事例を中心にみていく。

5月28日、彼らはハノイ川沿いの夏营地へ移動した（図1-1）。天幕をたたみ、家財道具も一緒にして、シベリアカラマツの生木でつくった牛車に積むと10台になった。一緒に春營していた息子のパワー（32歳、男性）も、同じ夏营地へ追って移動した。引っ越しの日には、親しい家の若者と子どもに頼んで、手伝いに来てもらった。

夏营地は春营地から3km離れている。標高で30mほど下がってハノイ川の川辺に夏營した。女の子たちは5ℓのアルミ缶2つを手に、1日に何回も水汲みにいった。夏には水が豊かで、炊事、洗濯に利用するほか行水も頻繁にできた。燃料は、南のウグームル谷の森へ出かけ、山火事で焼けたり、立ち枯れて乾いた直径10~30cmの木を鋸と斧で切り倒し、牛車に積んで運んでくる。

夏营地の3カ月間には、搾乳、乳製品の加工、毛刈り、去勢、遅生まれの出産、毛皮獣の狩猟、畜産物の売買や物々交換といった生産活動のほとんどが集

中する。モンゴルの短い夏は牧繁期であるが、その柱となるのは搾乳にまつわるたくさんの作業である¹⁷⁾。表1-2からわかるように、夏营地では全種類の家畜の搾乳が行われる。搾乳する家畜は母群と仔群に分けて放牧するので、多くの労働が必要になる¹⁸⁾。マンダーの夏营地の4世帯（表1-3参照）は当番制で日帰り放牧にあたっていた。各世帯は、「牛当番」と「羊当番」¹⁹⁾を1日ずつ担当すると、次の2日は放牧の仕事から解放されるのである。当番の世帯は、担当家畜の1日の放牧、母群と仔群の分離、搾乳のための宿营地への連れ戻しの責任を負う。

ハイルハンの人々は、協業や分業のしくみを発達させて、牧繁期の労働をうまく楽しくこなす工夫をしている。ほかにも、馬群を夜間放牧に出すためのホトアイルの枠を越えた地縁的な協力がみられた。昼間、馬は各世帯の個別の管理下にあるが、搾乳のために約10時間も拘束されて、日中の放牧時間が大幅に削られている。これを補うためには、夜間、オオカミから守りながら放牧しなければならない。そのため、マンダーのキャンプを含む近隣の4つのホトアイルに属する8世帯が協力し、一晩に2人ずつの若い牧童を徹夜の見張り番として出して、約10群、200頭以上の馬を共同で放牧した²⁰⁾。

牧民は牧畜作業の日取りを決めるのに、チベットの陰暦上の吉凶やモンゴルの占星術に従う²¹⁾。マンダーは、羊・山羊の搾乳の開始日は月、火、水曜日のいずれかに定め、終了するのは月、土曜日以外を選ぶという。そして、馬の搾乳は戌の日に始め、終えるときには寅の日を選んで、「仔馬よ、トラのように雄々しく育ってゆけ」と願いをこめて草原に放つという。

家畜を扱う夏の仕事は、原則として搾乳以外すべて男性の領分である。夏の間、毎日、女性は搾乳と乳製品を加工する仕事に追われる。家畜種ごとに乳を区別して、馬乳は馬乳酒に、牛乳はバター、クリーム、酸乳（ヨーグルト）からつくる乾酪、加熱してつくる凝乳、蒸留酒などに、羊乳・山羊乳は酸乳などにそれぞれ加工する²²⁾。

秋——冬と春への準備——

秋から春にかけて、人々はハノイ川に流れ込む支流の谷筋へと散っていく。地形の入り組んだ谷筋に宿営するのは、北西の季節風から暮らしを守るためにもある。8月29日、マンダーは、夏营地から道のりで約7km離れた秋营地へ移った。秋の移動は、酒の瓶や発酵中の酸乳の入った樽があつて荷物が多い。秋营地でもまだ乳の出る家畜は搾乳し、貧窮する冬・春に備えて乳製品を加工して貯蔵する。行商人が来れば、小麦や長靴などの冬から春に必要なものを乳製品と交換で手に入れる。

秋には、来年の夏まで食べつなぐ1年分の肉も用意する。モンゴルでは家畜の体重は、環境の季節変化に適応して夏から秋に増加し、冬から春にはひどく痩せる²³⁾。だから、もっとも太って脂がのっている晩秋に屠殺して、肉を冷凍、乾燥させて保存する。そして次の秋まで、家畜はできるだけ屠殺しない。

晩秋から翌年の初春までは牧閑期である。搾乳をしないので、放牧では母子群を分離せず、種類ごとに一群として放牧する。マンダーの秋营地では放牧の当番は「家畜当番」とよばれ、全種類の家畜の複数の放牧群の日帰り放牧を1世帯で担当した。家畜当番は、経験と分別のある騎乗の成人男性が1人でこなせる労働であるが、子どもに手伝わせることが多い。

晩秋、メス牛の搾乳量が日に日に減っていく。人間の食卓からも生クリームや新鮮な乳製品が消え、昼間の食物は堅い乾酪ばかりになる。夏には、かまどのとろ火の上にはいつも乳脂肪を取り出すための牛乳入りの鍋がのっていた。しかし秋の末にすべての川や沢が氷結すると、かまどの上の鍋の中では、川から割り出して取ってきた大きな氷塊だけが溶かされている。水を使うのにも氷割りや薪取りといった男性による力仕事が必要になり、生活の厳しさを感じさせられた。

冬——種付けと忍耐——

秋营地には1カ月だけいて、10月24日にツォヒヨート谷上流の冬营地に移った。マンダー家より1カ月も早く冬营地入りする人々もいたが、マンダーは、「家畜のことをわかっていないやつらは、こうして早く冬营地へ行く。しかし、我々は家畜のことを考えて秋营地でもっとねばる」と言った。早く移動する人も遅く移動する人も、それぞれ独自の家畜管理の戦略をもっている。季節ごとの遊動では、世帯主が家族と家畜の生存をかけて移動の時期と行き先を決定するのである。

冬の大切な仕事として、家畜の種付けの調整がある²⁴⁾。種オスはいつも慎重に選ばれている。選ばれなかったワカオスは去勢される²⁵⁾。数年連続して使った種オスは、売ったり、去勢後1年間くらい肥育してから屠殺したりする。交尾の時期は、牛と馬では放任であるが、羊・山羊は人間によって管理されている。

羊・山羊の発情期が近い晩夏、エムト谷に種オスを専門に預かる2世帯のキャンプができた²⁶⁾。希望者は、種付け予定日までそこにタネ羊・タネ山羊を預ける。早すぎる交尾を防ぐためには、種オスに布製の前掛けをつけて予定日まで交尾を防ぐ方法もある。しかし発情した種オスは群れ行動を搅乱し、肥育期である秋の大切な放牧・採食時間を減らすので、特別宿营地に預けるのだという。預けた人は翌春、預かり代として仔羊を1頭支払うことになっている。

10月初旬から11月初旬、人々は自分の種オスをエムト谷から連れて帰る。そして、各々の羊・山羊放牧群の中に放つと、交尾が始まる。種付けを始める日はホトアイルによってさまざまであるが、羊・山羊の妊娠期間は150日だと知られており、交尾計画はすなわち出産期計画となる。

早く種付けを行う人は、早い出産によって仔を早く成長させ、十分に大きくなつたころに次の冬を迎える予定している。牧草が芽吹き直前の最も貧しい時期に寒波が来ると、すべての家畜種において当歳仔がばたばたと死ぬ。こ

の損失を最小限に抑えようとする戦略なのである。仔山羊はとくに、暖かくなつてから生まれると下痢をしやすいので、羊よりも先に寒いうちに生ませた方がよいという人もいる。

一方、マンダーのように遅く種付けするのは、メスに飼料要求量の少ない妊娠状態²⁷⁾で牧草の乏しい春を越えさせ、十分に暖かくなつてから安全に出産させようという心づもりであった。いずれにせよ、ハイルハンで羊・山羊の出産期が注意深く決められ、出産時期を短期に集中させるのは、牧草の豊富に生え揃う時期、つまり雨期が7、8月に一定していて、かつ短いからである。

冬は牧閑期だが、牧民と家畜には体力と持久力が要求される。牧民は、家畜の弊死や病死を最小限に抑えるように努力する。働き者のダシジャウは、冬から春にかけて、本营地のほかに8kmほど離れたところにオトルとよばれる家畜营地を設け、まだ草の残っている場所で馬、羊、山羊を放牧した。家畜营地には小さな天幕をたて、ダシジャウの冬营地の3世帯から男性が2人ずつ交代で出て、2、3日ずつ泊まって放牧を行った。しかし、野原はどこも10cm以上の雪に覆われ、家畜は自力で雪を掘り返して、枯れて栄養価の低くなった草を食べなければならないので、疲弊していった。

牛は泌乳期間が長く、まだ搾乳できる個体もいたので女性のいる本营地に残され、その近くで放牧された。成長が悪くて長距離の放牧に耐えられないと判断された当歳の仔羊5頭、仔山羊4頭も本营地のまわりで放牧され、毎日1回、水と、補助的に干し草も与えられた。出産期の近づいた3月末、羊・山羊の本群が家畜营地から春营地へ戻された。

女性と子どもの暮らす本营地で牛の搾乳を行い、男性の担当する家畜营地で馬、羊、山羊の肥育を行うこの家畜管理形態は、社会主义時代には全牧戸に対して義務づけられていたという²⁸⁾。現在、ハイルハンでオトルによる放牧を行うのはまれで、ダシジャウのキャンプくらいである。

2 遊牧とは

——なぜ移動するのか、どこで、誰と一緒に暮らすか——

マンダー家の遊動

マンダー家は、1997年の春から98年の夏にかけて草原の6つの地点に宿営した（図1-1）。その時期に、マンダーが飼養していた羊・山羊群の中には、妻の父と息子パワーの2人から恒常に預託されている個体も入っていた（表1-3）。98年の秋から99年の春までは、子どもを通学させるため、学校や行政区の役場のあるバグ・センターの周囲で宿営した。その間、羊・山羊群は草原にいるパワー家が預かった。図1-2は、その羊・山羊群を預かっている家が、一緒にホトアイルを組んだ世帯の変化を示している。98年の夏まではマンダー家を中心に、98年の秋以降はパワー家が中心となっている。

図1-2および本文中に登場する人々が互いにどのような親戚関係にあるのかを示すのが図1-3である。ハイルハンでは、狭い地域で婚姻を重ねてきたため、ほぼ全員が親戚関係にあり、「ハノイ川の民はみな近い血族である」と当事者もいう。しかし、父方、母方双方において、7親等までの近い血族とは結婚してはいけないといわれ、近い親戚と遠い親戚が区別されている。遠い親戚で、日常的にも関係の薄い人は、「他人」や「知人」、「友人」と認知される。図1-2の白帯の人々をマンダーは、「知人」と考えているが、私があえて、彼らを親戚・姻戚関係に位置づけたのが図1-3である。

ハイルハンでは、ホトアイルのメンバー構成は流動的である。ホトアイルを組む相手は、親戚や知人といったさまざまなカテゴリーに入る人々が、時々の状況によって選択される。親子が一緒に宿営することは多いが、それも夫方、

図1-1 ハイルハン・バグにおけるダシジャウ、マンダー、パワー家の季節移動

追跡期間：ダシジャウ家：1997年夏～1998年夏 マンダー家、パワー家：1997年春～1998年夏

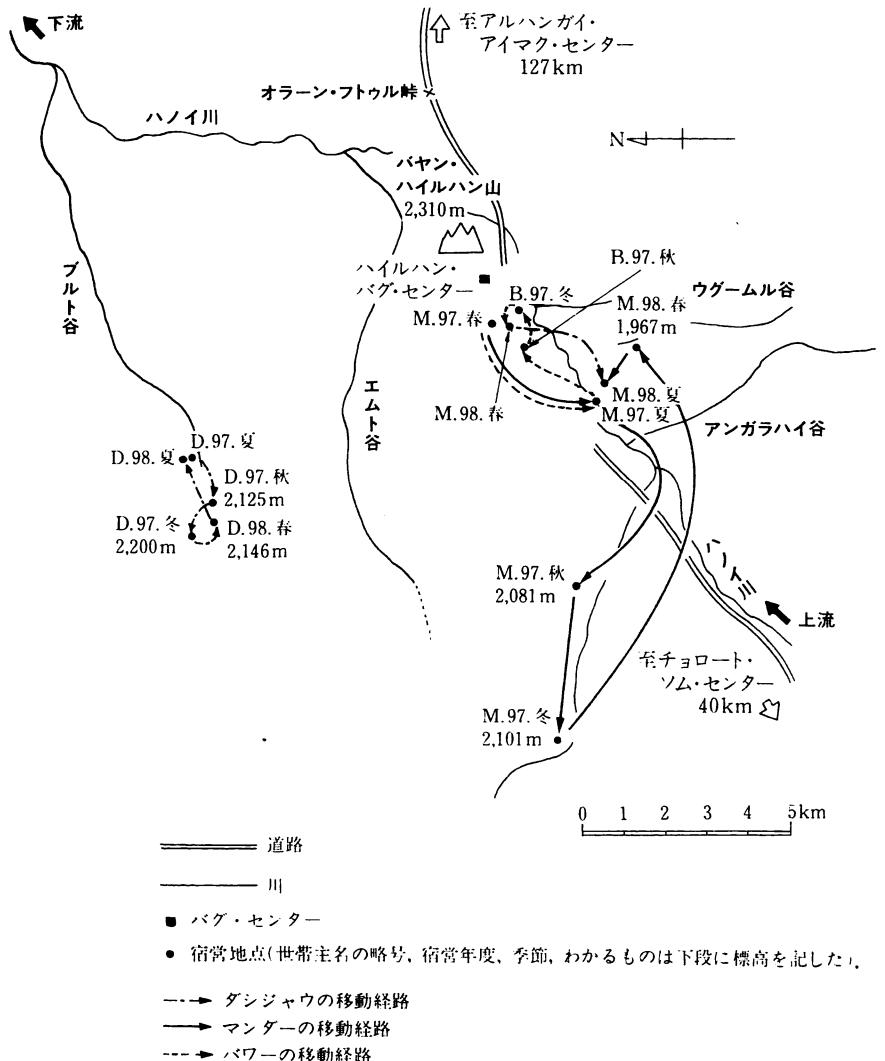
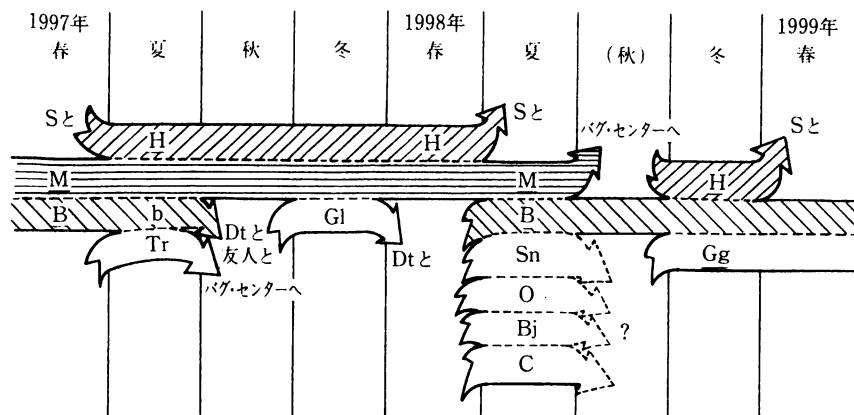


図1-2 マンダ一家またはパワー家が一緒にキャンプした世帯



注：帯状の矢印は各世帯を表し、世帯主名の略号が記されている。

マンダ一家またはパワー家とホトアイルを組む世帯で、その前後の状況が明らかなものは、ホトアイルを組んだ相手等を矢印の前後にこれを記した。

1998年の秋には、マンダ一家はバグ・センターにいて、パワー家が草原にいたが、パワー家がホトアイルを組んだ世帯は不明。

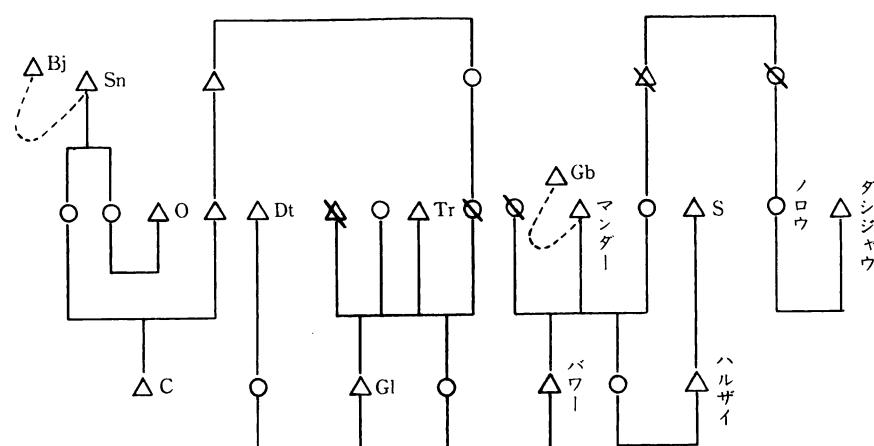
妻方双方の間を行き来する。

図1-2に示される、1997年の春から99年の春に、マンダ一家またはパワー家が一緒に宿営した世帯の中には、97年の夏に馬の夜間放牧を共同で行った8世帯は含まれていない。その中の1世帯とは、数年前に、マンダ一家とパワー家が一緒になってホトアイルを組んでいる。このように、彼らが選ぶ協業のパートナーは少数の近親者に限られない。「知人」、「友人」という新たな関係を構築することで、多様な関係性にある人々を選択範囲に入れることができる

なぜ移動するのか

ハノイ川とその支流域の全体を長い時間の流れのなかで見渡していると、季節の変わり目ごとに、異なる場所に異なる数の天幕の集まりが現れては消えて

図1-3 本論に登場する人々の社会関係



○女性、△男性

□、△故人(高齢者で命運かどうかわからぬ場合、○、△で示している)。

○、△の右側に名前または略号を示した。本文中に名前の記されない人は略号。

□ きょうだい関係。

□ 婚姻関係。ただし、□a △b ○cは、bが妻aと死別し、cと再婚したことを示す。

□ は予想される最も近い親戚または姻戚関係。

いく。ハイルハンの牧民たちは、いったいどのような具体的な理由をもって、季節ごとに遊動しているのだろうか。

彼らが第1にあげるのは、家畜の食う牧草と子どもの通学の都合である。

自然草地に依存した牧畜では、広大な放牧地を必要とする。そのため、新しい草地を求めて移動するのである。さらに、家畜を安全に放牧するには、1人の成人男性の1日分の労働力を必要とする。このため、協業による省力化を図るために人々は集住すると考えられる。一緒にキャンプする世帯が多いほど、放牧の当番にあたる頻度は低くなる。しかし、家畜群に対する草地の環境収容力 (carrying capacity)²⁹⁾には限度があり、また、放牧群の規模が大きすぎると管理が難しくなる。このため、ホトアイルの規模は、構成員の家畜頭数や環境に規定される。

子どもの通学の都合もある。1997年には、バグ・センターに3年制の分校

があった³⁰⁾。9月の新学期のころには、学齢児のいる世帯が中心となって、ハイルハン中のホトアイルの構成を大きく変化させる。通学のからんだ秋营地への移動は、子どもの成長にともなって毎年事情が変わるので、長期的にもホトアイルの構成に強く影響している。子どもを通学させようとする親は、バグ・センターの近くに移動したり、親戚に子どもを預けたりする。そのため、秋から春までは、学校の周囲半径2km圏内は混み合って家畜の放牧が難しくなる。そこで、親戚同士で、一方が子どもを預かって行政区の中心地に宿営し、他方が草原で家畜を預かるという「分業」も行われる。新学期には、10km程度の遠距離から通学する子どももいるが、寒くなるにつれて生徒数は減っていく。

このように、遊動には放牧と草地の維持、協業、通学などの諸条件が関わっている。では、ホトアイルを組む相手はどのように決められるのだろうか。1997年の秋营地への移動をめぐる根回しを例に、その過程をみていく。

どこで、誰と一緒に暮らすか

8月末ころ人々は互いに訪問し合って、一緒に秋营地する相手、家畜を預ける相手、子どもを預ける相手を探す。夏は、新年の祝いのころと並んで、人々が互いに訪問し合う短い社交シーズンであり、酒造りの季節でもある。ハイルハンの日常の社会関係は緊密で、礼儀と秩序を遵守することが求められる。それと同時に、酒の上の無礼講が許される社会的な雰囲気があり、鬱憤が爆発して喧嘩もよく起きる。ホトアイルの構成員どうしにも葛藤が生じることがある。夏には協業における責任が重いので、放牧の当番をしばしば放棄する飲んべえなどは、次期のキャンプ仲間の選択肢から外されることもある。秋の移動に際してホトアイルの構成がとくに大きく変わるのには、このような事情があつて、新しい人間関係が積極的に求められることも考えられる。

秋营地への移動をめぐる根回しは秘密裏に行われる。交渉過程は同じ夏营地内の他の者にすら知らされないことが多い。晩夏初秋には、出会った人々が互いに季節の挨拶の後に続けて、「お宅は秋营地へもう移動したか」、「いつ移動

するのか」とたずねあう。すでに移動した人は、「移動した」と答えるが、まだ移動していないくて、移動日を明日や明後日と決めたわけでなければ、「まだまだ先」とか「間もなく」と答える。移動予定地についても、話したくなれば「まだまだ先」と言う。季節移動の決定に関して第三者は、移動する場所と移動する日を気楽にたずねるが、「誰と一緒に宿営するか」とは決してたずねない。移動の決定においては、よい放牧地と子どもの通学のみを理由として語り、人間関係に言及することは避けられるのである。

秋营地でのキャンプ構成員を決めていく根回しの段階では、以前の関係がそれほど深くない世帯を求める傾向や、多くの世帯と一緒にホトアイルを組みたいという志向性が読み取れる。たとえば、マンダーの娘婿ハルザイはこれまでずっと、マンダーか、実父のどちらかと一緒にキャンプしていた。ところが、この秋に初めて同年代の知人と2世帯のみで秋を過ごす相談をした。結局、この計画はつぶれ、次にはマンダーと他の3世帯を加えた5世帯で秋营地するはなしが出た。しかし実際の秋营地への移動で明らかになったのは、ハルザイはマンダーと2世帯で秋を過ごすことであった。

一方、パワーは、3人の酒飲み仲間と一緒にになると噂されていた。だが、これもならず、結局は通学児童をもつほかの4世帯と一緒に、バグ・センターから約2kmのところに宿営した。この秋、パワーはマンダーに馬、羊、山羊を預け、そのかわりにマンダーの3年生の娘を預かった。

このように、ハイルハンの季節移動とホトアイルの構成の離合集散的な状況には、家畜管理上の必要に限られないさまざまな社会・文化的要因が関与しているのである。

3 羊・山羊混成群の放牧管理——群れを導く牧夫の仕事——

放牧の年周リズムと日周リズム

牧民たちが季節ごとにキャンプ地とキャンプ仲間を変えると、家畜の放牧地と放牧群の編成も変わる。ひとつのホトアイルを構成する複数の世帯が保有する家畜は、ひとつの「放牧群」としてまとめて管理されるのである。

マンダーの保有する羊・山羊群には、パワーらが所有する個体が恒常に含まれている。そして、この群れが実際に放牧されるときには、その時に一緒にキャンプしているほかの世帯の群れと一緒に管理される。図1-2に示されるようなホトアイル構成員の変化にともなって、放牧群の構成と規模も季節ごとに変わる。一緒にホトアイルを組まずとも、家畜だけが季節的に預けられることもある。たとえば、子どもの通学のためにバグ・センターに宿営する人や、病気の治療のために町に長く滞在する予定の人が、一時的に家畜を親戚や知人に預けるのである。このため、放牧群の編成では、ホトアイルの構成よりもさらに複雑に、多数の保有者の羊・山羊群が離合集散することになる。

では、このような寄せ集め的な放牧群を、牧夫はいかにしてまとめているのだろうか。これをるために、牧夫が放牧中の羊・山羊をどのように統率しているのかを具体的にみていく。

羊・山羊群の年間の放牧リズムは、季節によって変わる牧地の地理的条件と、搾乳を目的とした母子群の分離と合流によって規定されている。年間の放牧管理方法は大きく以下の3つに分けられる。春の出産期、夏の搾乳期、秋から初春にかけての搾乳をしない牧閑期である。出産期の群れ管理方法についてはすでに述べた。ここでは、それ以外の時期の管理方法についてみていく。

【夏の放牧】

夏の放牧地は地形がオープンである。見通しがよい草原では、群れはみずか



牛車で水を汲んできたガンバートルと子どもたち。

らまとまって、あまり拡散せずに移動と採食をする³¹⁾。宿営地から遠くまで見渡せる牧地では監視もしやすい。当番の牧夫は宿営地を拠点に群れを見張るが、ソ連製の双眼鏡を利用して、半径7~8kmくらいまでの周囲の山肌に点在するいくつもの群れのなかから自分のホトアイルの群れを見分けている。

群れが遠くへ行きすぎたり、見えなくなったりと何か異変があれば、騎乗の牧夫が行って「介入」する。放牧中の群れに対する牧夫の「介入」とは、拡散しすぎた群れをまとめる、群れの進行速度を調節する、群れの進行方向を変える、採食している群れを移動させる、といった目的で行われる。具体的には、牧夫は馬上から甲高い声で「ターッチ！ タッチ、タッチ……」とか「チャー！」と叫び、馬の手綱を振り回し、それでも思い通りに群れが動かないときには馬から降りて足を踏みならし、乾燥した牛馬の糞を投げつけ、腕を振りかざして羊・山羊の注意を引くように努める。しかし、羊・山羊は毎日の介入に慣れきっているので、とくに採食中には、人間の存在

と介入に気付きながらも弱い刺激には明瞭な反応を示さない。

搾乳期には、群れを母群と仔群に分けて放牧し、搾乳する時間まで合流させないようにするのも大切な務めである。当番の牧夫は、朝、大囲いで夜を明かした山羊の母群と、囲いの外に座っていた羊の母群と一緒にして、決めた方向に追って行く。しばらくして、小囲いから仔羊・仔山羊を出して、母群と反対の方向に追うが、仔はたいてい宿営地に戻ってきて家のまわりで遊んで過ごす。

【秋から初春にかけての放牧】

秋には宿営地が谷筋に移動するので、放牧ルートはいくつもの谷や稜線をまたぐ。地形の複雑な場所では群れは散開し、牧夫の監視できる視界は狭く限定される³²⁾。このため、牧夫は1日の大半を羊・山羊群に付き添って過ごす。

羊・山羊の搾乳を秋に終えると、翌春の出産期までは母仔群を分離することなく、全個体が一群として放牧される。全種類の家畜の放牧を担当する家畜当番は、家畜群を種類ごとに適切な時間に宿営地から放牧地へ追いやる。その後、3時ころまで羊・山羊群に付き添い、移動と採食と休憩へと導きつつ、馬と牛の群れが視界から出ないように、そちらへもときどき行って「介入」を加える³³⁾。各群の距離は数kmにも及ぶことがあるが、牧夫は乗馬の機動力を利用して対応する。

牧夫が馬に乗っているということは、騎馬技術を放牧に取り入れないほかの牧畜地域に比べて、放牧中の牧夫の移動を格段に楽にしている。しかし、採食中の羊・山羊は馬で追われてもなかなか動こうとしないので、牧夫はたびたび下馬しなければならない。もしも、全行程を歩き続ければ介入効率は上がるだろう。ところが、羊・山羊の放牧行程は1日12km以上あり、弓形に拡散して足場の悪い傾斜地を登っていく。1人の牧夫が羊・山羊に加えて牛と馬をもまとめて放牧することは、馬に乗ってはじめて可能になるのである。

放牧の仕事は忙しい

では、放牧中の群れを統率するために、牧夫は群れに対してどのくらいの量の介入行動を行っているのだろうか。1997年の10月初旬、私はマンダーの秋営地で羊・山羊の放牧管理を行う牧夫の行動を調査した。放牧群の編成は、マンダーとハルザイの2世帯が保有している羊・山羊群で、羊185頭、山羊86頭の合計271頭であった。

まず、1日の放牧の流れを概観しよう。牧夫は、朝10時ころに群れを追立てて宿営地から出発させる。30分から1時間後、騎乗で行って群れの進行に追いつき、約5時間かけて10~15kmを周遊するペースで移動しながら採食させる。午後3時ころ³⁴⁾、宿営地の近くに帰ってきて、川辺の低湿地に群れを解放して牧夫は帰宅する。川辺で解放された群れは30分から1時間くらいその場で座り込んだり、水を飲んだり、草や土を食べたり、哺乳したりしてくつろぐ。やがて全体が移動ムードになり、一斉に北西方向に移動し始める³⁵⁾。家に戻った牧夫はその後、宿営地にいながら、しばしば戸外に出ては群れの様子に気を配り、必要とあらば出かけていって「介入」する。日暮れ近くには、群れを宿営地の近くに連れ戻す。日没半時間前くらいの7時ころ、山羊は囲いのなかへ入れられ、羊はたいていは囲いの外で座りこんで夜を明かす。

1997年10月5日と10月9日に、牧夫が羊・山羊の放牧中に群れに対して行う介入行動を10秒を1単位として測った³⁶⁾。出発から3時ころの休憩時までの、牧夫が群れに付き添っている時間の平均は5時間42分30秒であり、このうち、牧夫が介入行動をとっていた時間の平均は1時間22分45秒(24.2%)³⁷⁾であった。このように、ハイルハンの牧夫は、群れを統率するために多大な労働投下を群れに対して行っているということがわかった。

放牧中の群れの混交

ハイルハンの牧夫はなぜ、かくも多量の介入行動を群れに対して行うのだろうか。彼らにたずねると、「羊・山羊は人間が見張っていて導かなければ、行方不明になる。そして、オオカミに食われたり、泥棒に取られたり、ほかの群

れと混ざったりする」という。害獣や泥棒は世界中の牧畜民の共通の悩みである。しかし、自分の羊・山羊放牧群が、ほかの羊・山羊群と「混交」³⁸⁾するというには、ハイルハンの牧民の抱える特異な問題である³⁹⁾。私は、放牧中の群れが、牧夫の油断したすきに他群と混交する事件について多数耳にし、4回観察した⁴⁰⁾。

ハイルハンの人々は群れどうしが混交することを非常にきらっている。群れが混交した時、もとどおりに分けることができず、自分の家畜が相手の群れに残されると、それは永遠に戻ってこない可能性が高い。放牧中、ほかの群れから他人の家畜が迷い込んでくると、迷い込まれた方は所有者に知らせることはなく、引き取りに来るまで放っておく。放牧についてくれば一緒に追うが、群れになじまずに後れることが多い。そういう場合は、牧夫は他人の家畜をわざわざ追うことなく、草原に捨て去ってしまう。

羊・山羊群は混交すると、人間の介入なしではもとどおりに分かれることはできないと牧民たちは考えている。彼らは自分の保有する家畜を個体識別していて、特定の個体を見て自分のものか否か判別できる。しかし、他群と混交し、興奮して動き廻る数百頭の羊・山羊の中から自分の保有するすべての個体を分離して取り戻す作業は、牧民を心身ともに疲弊させる⁴¹⁾。

ハイルハンで混交事件が起こるのには、放牧群の編成の頻繁な変化が関係していると予想できる。牧夫が多大な労働を投下して統率しようとしているのは、季節移動のたびに編成されなおされた、寄せ集め的でまとまりのない群なのである。これを分裂させたり、四散させることなく移動と採食をさせ、かつ盗難やオオカミから守るために、牧夫は一時も気を抜けないのだろう。

* * *

かつてモンゴルには、牧民を社会・経済的に統合する父系出自集団があった。それが社会主義革命によって破壊され、集約的な牧畜生産を目的として集団化が行われた。そして、これも崩れさったあとでの社会変化のなかで、牧民自身が

新たな生き方を模索しているのが現在の状況である。ハイルハンでは、核家族が社会関係の単位となって離合集散を繰り返すことによって、ネットワーク的な社会がつくられている。彼らは地縁、血縁を利用してさまざまな相手と状況に応じた協力関係を取り結び、家畜管理の集約化をはかっている。そして、ハイルハンの羊・山羊群がほかの群れと混交するという特殊な事態と、牧夫の群れにたいする介入行動の特異性には、新たな生き方を模索するモンゴルの現代的な状況が映し出されているのである⁴²⁾。

[注]

- 1) アイマク（県）、ソム（郡）の下にある行政の最小単位（行政区）。
- 2) 1999年3月から4月にかけて再びハイルハンを訪れたところ、ものが以前よりも多くなり、市場経済化の影響が急速に及んでいるという印象を受けた。たとえば、遊牧世帯におけるラジカセの普及率は数倍に上がっていた。
- 3) アルハンガイ県は、1996年度の統計によると、モンゴル国の22の県（ウランバートル市も県に準じるものとして加えられている）の中で、世帯あたりの平均家畜頭数が最も少ない。
- 4) 本書で使われるホトアイル（モンゴル語で qota ayil）という言葉は、「草原で、ひとつ以上の世帯が宿営している居住集団」を意味する。本論では、季節的に限定された居住集団の人的側面を指すとき、これをホトアイルとよぶ。空間的側面を指す場合と、時間的な限定のないものをキャンプとよぶ。なお、アイル（ayil）とは、「世帯」、「おとなりさん」、「よそ」を意味し、ホトアイルは正しくは、「ホト・アイル」である。
- 5) 調査中にハイルハンでみられたホトアイルの規模は、1世帯から7世帯までであった。ただし、1世帯だけで宿営することは少ない。
- 6) なお、本論ではモンゴル文字の転写は小沢重男 [1983] によった。

- イル構成は、1998年の春营地のメンバーである3世帯にもう1世帯が加わったものであった。
- 6) とくべつに虚弱な仔羊はカバンに入れるという。
 - 7) 出生直後の仔の死亡率は高い。放牧中にマーモットの穴にはまつたり、群れを離れて草原で夜を明かし、オオカミ、ワタリガラス、猛禽類の餌食になったり、凍死したりする。
 - 8) 初産のメスが育児行動を行わないことや、双子を出産したメスが一方のみに乳を与え、他方を受け入れないことが、毎年のように起こる。牧民は、このような乳に恵まれない仔と、仔を失った母とを、学習によって哺乳ペアにさせる。小長谷 [1991] に詳しい。
 - 9) 小長谷 [1991]。
 - 10) 山羊にはマーキングは付けなかった。
 - 11) ダシジャウの息子の妻の母は、足のリボンに加え、自分の仔羊3頭の左耳に赤い小さな布切れを縫い込んだ。
 - 12) マーキングの目的のひとつは、放牧を担当する他家の男性にわかりやすくすることであろう。
 - 13) 家畜の年齢については、去勢オスの年齢は比較的よく知られているが、経産メスの年齢を知っている牧夫は少ない。必要があれば、捕まえて、歯の数や磨滅具合から年齢を概算していた。
 - 14) ハルザイの羊76頭は21家系に、山羊27頭（他の個体と母系の血縁関係のない種オス1頭を含む）は9家系に分けられた。世代深度については、全30家系のうち9家系が3世代、残りが2世代である。群れの世代深度が浅いのは、ハルザイが若いことも関与していると考えられる。
 - 15) 分離放牧が始まったばかりの頃、母子の群れを分離するのに、1頭ずつ捕まえては入れるべき匂いを入れるなど、大変な手間がかった。しかし、毎日の繰り返しの中で家族が場面を学習し、作業時間が短くなっていた。
 - 16) 9月末から10月に観察されている。
 - 17) 山崎は、搾乳に関わる技術を体系的に詳述している（山崎 [1997]）。
 - 18) ハイルハンでは行われていないが、羊・山羊の母子を分離して放牧するため、近隣の宿营地の間で仔群を交換する方法もある（後藤 [1968]、三秋 [1996]）。この協業関係にある世帯の関係は、サーハルト・アイル（sacaqalta ayil）とよばれる。

- 19) 「羊当番」は羊・山羊混成群の放牧に従事する。
- 20) ハイルハンではこのような馬の共同放牧に参加する世帯が、互いに相手をサーハルト・アイルとよんでいた。このことばは、従来の研究では、搾乳を目的とした羊・山羊の仔群の交換を行う隣り組（後藤 [1968]）を意味するとされた。しかし、ハイルハンでは羊・山羊の仔群の交換を行わない。ここからわかるのは、サーハルトとは羊・山羊の搾乳を目的とする関係のみならず、一般的な協業関係にある相手や、その関係性、もしくは近所づき合いをする相手をも意味するということである。
- 21) 市販の占星暦が「牧民の暦」とよばれて牧民の間で普及している。モンゴルの暦と占星術については松川 [1995], [1998] に詳しい。
- 22) 乳製品については小長谷 [1992a] などがある。
- 23) 秋から春にかけて、体重が20~30%減少するという（山崎正史、宮崎昭 [1992]）。
- 24) 種付けと屠殺は晩秋から初冬にかけて行われるが、その時期は家によりさまざまである。
- 25) ハイルハンでは、牛とヤクは明け2年目に、馬は明け3年目に、羊と山羊は生後6か月目までに去勢される。
- 26) 年ごとに、都合のつく世帯が交代でこの役を引き受けるようである。
- 27) 山崎正史、宮崎昭 [1992]。
- 28) 社会主義時代には、旧ソ連、旧モンゴル人民共和国の遊牧地域で広く、このような性別の分業による生産の集約化が図られた。
- 29) ある地域の自然条件や資源の量によって規定される維持可能な最大個体数。
- 30) 本校はチョロート・ソム・センターにある。
- 31) 今西錦司 [1948]。
- 32) マンマーの冬营地からの家畜の放牧は、南向き斜面のステップで行われることが多かったが、稜線を越えると、その北側の斜面にはカラマツ林が発達しているので、そこへ群れが入らないように注意していた。
- 33) 群れがある程度まとまって、牧夫の意図する進行の軌道にのっている時には、牧夫は、毛皮獸であるマーモットの巣穴に太い針金で作った罠をしかけたり、銃で撃ったりもする。
- 34) 9月19日から10月20日までの8日間の平均時刻は15時2分。
- 35) 北西は、冬の季節風の吹いてくる方向でもある。

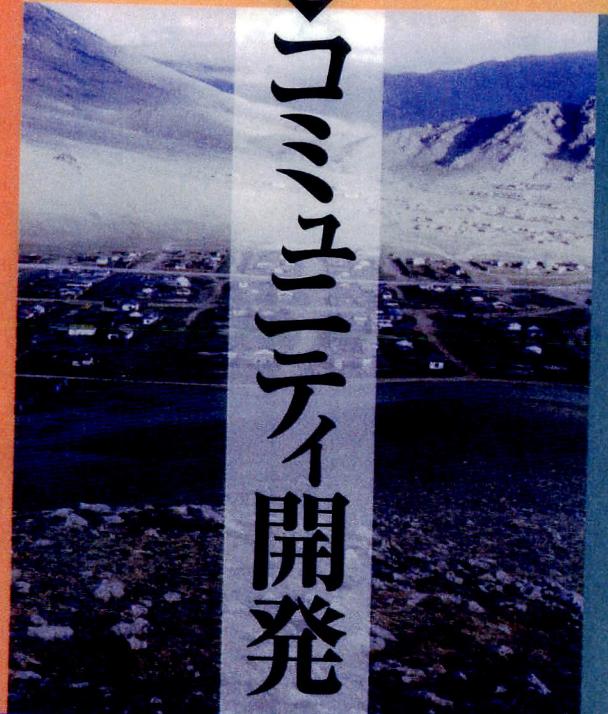
- 36) 出発から囲いに到着する終了までの全放牧時間の平均は9時間20分であった。
- 37) 介入行動量についての比較可能なデータには、以下の2つがある。なお、すべてのデータにおいて、ひとつの群れに対して同時に「介入」を行っている牧夫は1人である。
- ケニヤ北西部の遊牧民トゥルカナのヤギ群（198頭）の放牧；7.9%（太田[1982]）。
- ケニヤ北西部の牧畜民サンブルの、少数のヒツジを含むヤギ群（47頭）の放牧；1.28%（鹿野[1991]）。
- 38) 本論文中、「混交」とは、人間の意に反して2つ以上の家畜群が合流することであり、意図的に一緒にする「混成」とは区別される。
- 39) 従来の研究では、複数の群れが近接しても混じりあわず、自律的にもとどおりに分かれていく事例が、家畜群の特徴的な行動として報告されてきた（太田至[1995]、谷[1997]）。これらは、数年間、編成が変わることなく群れが管理されていることを前提としていた。群れの混交については、行動学的な報告はない。
- 40) ここでは紙幅の都合で詳しく記さなかつたが、別稿で事例を紹介するつもりである。
- 41) 1997年10月6日に、マンダーのホトアイルの271頭の羊・山羊群が、隣のホトアイルの300頭以上の群れと混交した。すぐに、2人の牧童が2時間4分30秒かけて分離作業を行った。しかし、後で、両ホトアイルの人々が総出で調べると、取り残しの羊・山羊が発見された。
- 42) この調査は、平和中島財團の奨学金を受け、京都大学の先輩と同僚に助けられ、モンゴル国立大学社会科学部人類学・考古学講座に研究生として所属して行われた。ハイルハンの人々は長きにわたって私を受け入れてくれ、とくにデンバーはこの調査を全面的に助けてくれた。皆様に、厚くお礼を申し上げたい。また、本文中に登場する人々のお名前から敬称を省かせていただいたが、ここに謝して許しを乞いたい。

*本章に用いた写真2葉は風戸が撮影した。

モンゴルの家族

と

コミュニティ開発



島崎美代子

編

長沢孝司

日本経済評論社

編著者紹介

島崎美代子 (しまざき みよこ)

1927年生まれ、日本福祉大学知多半島総合研究所客員研究員。専攻：地域経済・社会開発論。

主要著書

『戦後日本資本主義分析』『島崎稔・美代子著作集 第1巻』自潮社、1994年。
『地域開発と自然環境——北部ラオスおよび東北タイの開発プロジェクト』『開発の断面——地域・産業・環境』日本経済評論社、1996年、ほか。

長沢 孝司 (ながさわ たかし)

1946年生まれ、日本福祉大学社会福祉学部教授。専攻：家族社会学。

主要著書

『社会・文化活動に取り組む』(共著) 大月書店、1991年。
『企業社会と人間』(共著) 法律文化社、1996年、ほか。

モンゴルの家族とコミュニティ開発

1999年7月25日 第1刷発行

定価(本体3200円+税)

編著者 島崎美代子

長沢孝司

発行者 栗原哲也

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2

発行所 株式会社日本経済評論社

電話 03-3230-1661 FAX 03-3265-2993

E-mail:nikkeihyo @ma4.justnet.ne.jp

URL:<http://www.nikkeihyo.co.jp>

装丁*鈴木弘 印刷・文昇堂印刷 製本・協栄製本

© M. SHIMAZAKI, T. NAGASAWA et al., 1999

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-8188-1079-7

Printed in Japan

〔日本複写権センター委託出版物〕

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。